

七尾港の「みなと文化」

北林 雅康・和田 学

目 次

第1章 七尾港の整備と利用の沿革.....	40-1
1. 古代	40-1
2. 中世	40-2
3. 近世	40-2
4. 明治期	40-3
5. 大正期	40-3
6. 昭和～平成期	40-4
第2章 「みなと文化」の要素別概要.....	40-5
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」 ..	40-5
(1) 芸能	40-5
(2) 文芸	40-5
(3) 信仰	40-5
(4) 食べ物	40-6
(5) 生活用具	40-7
(6) 対岸交流	40-7
(7) 人物	40-7
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」	40-8
(1) 物資の流通を担う産業	40-8
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」	40-9
(1) 港湾関連産業	40-9
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」	40-10
(1) 料亭・廊	40-10
(2) 歌舞伎	40-10
(3) 祭り	40-10
(4) 来遊文人	40-11
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」	40-11
(1) 港発祥の地	40-11
(2) 港町の町並み	40-11
(3) 七尾港の眺望	40-12
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き.....	40-13
1. 港町の復活	40-13
2. みなとの賑わいの創出	40-13

所在地：石川県七尾市

港の種類：港湾

港格：重要港湾



【位置図】



【現況写真】

(国土交通省金沢港湾・空港整備事務所 HP)

第1章 七尾港の整備と利用の沿革

1. 古代

日本海に長く突き出た能登半島の北東側に大口をあけたように広がる七尾湾は、中央部に浮かぶ能登島を隔てて、北湾・南湾・西湾に分かれている。七尾港はこの中の南湾に位置し、古くから能登の中心的港として栄えてきた。七尾港が所在する七尾市は能登半島のほぼ中央部に位置し、平安時代には能登国の国府や国分寺が置かれ、能登における政治や文化の中心地であり、水陸交通の要衝となっていた。

七尾湾の歴史は古く、当時の様子を窺わせるものに『日本書紀』がある。『日本書紀』の斉明天皇6年(660)3月の条に能登臣馬身龍が、越国守阿倍引田朝臣比羅夫が率いた北方遠征の大船団に従軍して戦死したと伝える。七尾港周辺は古くは「鹿嶋津」と呼ばれ、豊富な船材と造船技術を有する「舟木部」と呼ばれる技術者集団が存在していた。馬身龍はそれらの指揮者として鹿嶋津から東北へ出発したと考えられている。

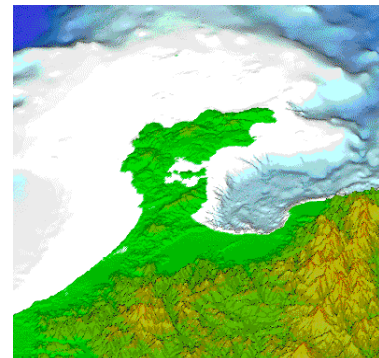
また、天平20年(748)の春には都から大伴家持が越中国国司として赴任しており、当時越中国に属していた能登を巡行している。そのときに七尾港付近で詠んだ歌に以下の2首がある。

とぶさ 立 船木 伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ

(『万葉集』巻17-4026)

かしま 香島より熊木を指して漕ぐ船の舵取る間なく都し思ほゆ

(『万葉集』巻17-4027)



【海底地形図 日本海】

(<http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN9/sodan/kaiteitikei/nihon002.gif>)

2. 中世

承久3年(1221)に成立した「能登国公田田数目録」によって、七尾湾岸や邑知潟周辺部を中心として80ヶ所の荘園が能登国に成立していたことが知られる。後に能登の日蓮宗本山とされる羽咋滝谷妙成寺を創建した日乗は、永仁2年(1294)に佐渡から京都に向かう途中の日蓮の弟子日像と船中で激しい論争をしたが、所口湊(七尾港)に着くころには日像に折伏して、石動山大宮坊乗微から日乗と名を改めたという逸話が残る。このことから、当時すでに七尾港が日本海側の渡海ルートの寄港地となっていたことを窺うことができる。

応永15年(1408)に能登国の守護となった能登畠山氏は、七尾港の南東に連なる石動山系の麓に広がる八田郷府中に守護所を築き、能登国経営の拠点とした。室町時代の守護所は領国支配のための軍事的な要素を兼ね備えると共に、多くの人々が物資などの物流を通して市が建てられて町場が形成されていく。天文13年(1544)に七尾を訪れた京の禅僧^{ぜんそう}彭叙守仙^{ほうしゆくしゆせん}が記した「独楽亭記」^{どくらくていき}には、七尾城下について「太守の恵みを懐って、家を山下に移し住む者、その数あまた、城府と軒を連ねて建ち並び、一里余りに及ぶ。呉の綾・蜀の錦・粟・米・塩・鉄などを行商する者あり、座売りする者ありで、これまさに山市晴嵐の景である。」とある。また、七尾湾内では珠洲焼や中居の鋳物製品、塩鯖、海鼠腸といった古くからの名産品が多く流通しており、七尾港は守護所と直結して能登の産物が集積する物流港であったことを知ることができる。

3. 近世

天正9年(1581)、前田利家が能登一国を織田信長から与えられ、その居城を山上の七尾城から港に近い小丸山に築く。それまで山麓付近に形成されていた七尾城下は七尾港を玄関とする城下町に整備されていった。天正11年に利家は金沢に移り住むが、それまでの転戦する間、七尾港から軍事物資が大量に輸送されている。

七尾港が位置する府中町には慶長17年(1612)に船税減額を伝えた「船頭權数引き達」や慶長18年の「能登国船役定」が残されており、七尾城下の中心的な役割を果たしていたことが知られる。また、正保4年(1647)に初めて加賀藩の御蔵米を上方船によって大坂輸送が成功してから、日本海側での海運が活発化してきたといわれる。

また、享保2年(1717)に加賀藩士森田盛昌の記した「能州紀行」には、「家数式千の余有て、越中・越後・佐渡・出羽・奥州・松前なぞへ船便り宜しき故、繁昌の所なり、酒屋数百余軒、是ハ佐渡、松前・えぞへ酒を商売する故也」と七尾港の繁栄振りを知ることができる。

加賀藩では天保14年(1843)に所口在住職を七尾に設けて、能登半島の海岸防禦を強化した。嘉永6年(1853)に藩主前田斉泰自らが能登の海岸部を巡見し、加賀藩でも文久2年(1862)に七尾港に隣接する矢田新浜に、艦船実習と軍艦根拠地となる七尾軍艦所を開設したのである。慶応3年(1867)には七尾港に3隻の英国船が入港し、七尾港の開港を要求している。この時、アーネスト・サトウも上陸し、陸路で金沢から大阪へ行っている。

4. 明治期

明治期に入ると船舶も帆船から蒸気船へと移行し、七尾港を拠点として能登半島沿岸部の沿岸航路が開設された。明治 17 年（1884）に七尾町の松井善四郎が七尾―宇出津（能登町）間で汽船一隻を走らせたのが始まりといわれている。

明治 32 年（1899）、開港勅令が公布され、「能登国七尾（南湾）」が開港の指定をうけた。明治 33 年には、日露沿岸定期航路の隔月寄港地として認められ、翌 34 年には定期寄港地（門司―七尾―ウラジオ線と小樽―七尾―ウラジオ線の 2 線）に組み込まれたのである。

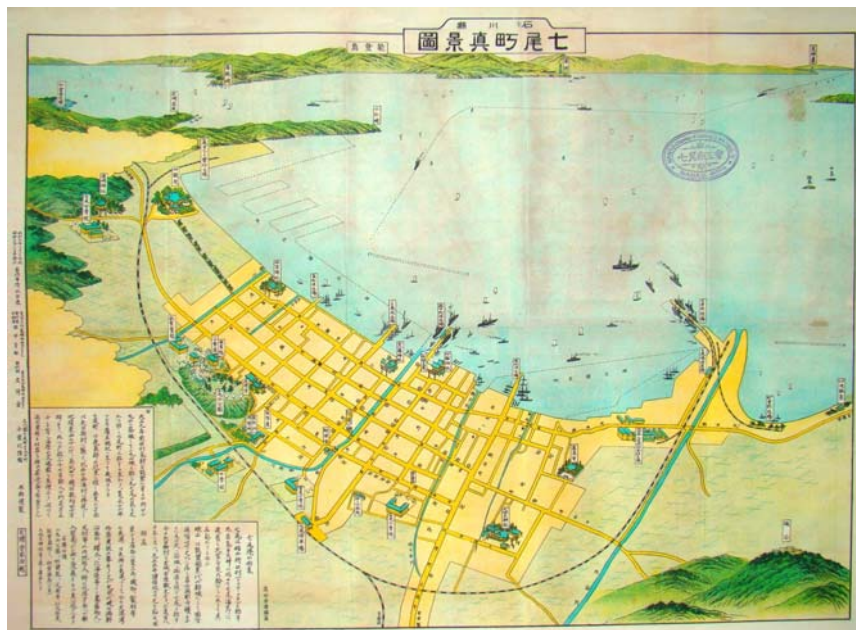
また、明治 31 年 4 月に七尾―津幡（現本津幡駅）間を結ぶ七尾鉄道が開通した。その背景には、シベリア鉄道開通による対岸貿易振興への期待があった。同 37 年には、矢田新埠頭にある七尾港駅を繋ぐ臨港線が延長開業され、海陸交通の接点として次第に繁栄することになる。



【七尾府中町埠頭場ノ景 大正時代〔絵ハガキ〕】

5. 大正期

北陸の主要港と朝鮮東海岸各港との間に循環航路開始するために七尾港湾の築港が急務であるとして、湾内の岩礁地帯の除去をはじめとし、湾内入口に観音埼灯台や航路標識などを設置したのである。また、七尾港出入りの船舶に給水の便を与えるために酒造りにも利用されていた「岩屋の清水」を水道管で送水するための埋設工事や、海陸連絡設備として投錨海底の浚渫や護岸兼繫船岸、荷揚場階段などを建設し港湾設備の充実を図った。



【七尾町真景図 昭和 2 年発行】

6. 昭和～平成期

昭和 2 年（1927）七尾港が第二種重要港湾に指定されると、本格的な修築工事を 12 年間工期の総工費 355 万円事業として開始することとなった。その後も、港湾施設の増強などに着手したが、昭和 20 年の終戦を迎えたことによってその完成には至らなかった。

戦後も七尾港の重要さを認識するにあたり、昭和 22 年に指定貿易港としての認可がおり、同 26 年には重要港湾に指定された。また、翌 27 年には戦時中に七尾湾内に投下された機雷の除去が終了したことを受けて「七尾港安全宣言」が出された。

昭和 39 年には船舶の大型化に対応する港湾を目指し、周辺域には約 30 万㎡の大田貯木場や住友セメント工場岸壁などを整備して、鉱産物や林産品の貨物を中心とした物流港湾であった。しかし、昭和 47 年に七尾港入口に近い三室地区で、臨海工業開発として LPG 輸入基地を建設して営業を開始したのである。同 49 年には大型船舶航行の妨げとなっていた森田礁が除去されて水深－11m の航路が完成した。

昭和 58 年から大田地区の七尾大田火力発電所用地の埋立工事を着工し、平成 7 年 3 月から 1 号機（50 万 kW）の営業運転が開始された。その燃料となる石炭も海外からの輸入とし、平成 10 年には 2 号機（70 万 kW）の運転も開始され、燃料物資の大量輸入に期待が膨らんだ。さらに平成 15 年には全国で初となる LPG 国家備蓄基地が七尾港入口に完成し、国内有数のエネルギー港として発展したのである。

また、平成 3 年にオープンした七尾フィッシャーマンズワーフ「能登食祭市場」は、市街地と連動させた臨海部の七尾港の新しい観光スポットとして注目を浴び、連日多くの観光客が訪れている。



【七尾フィッシャーマンズワーフ「能登食祭市場」】

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

(1) 芸能

七尾の船方の祝儀唄として古くから唄われてきた民謡に「七尾まだら」がある。七尾のほかに「輪島まだら」「輪島崎まだら」があり、「能登のまだら」として港を中心に発展してきた町場に伝承している。この「まだら」の伝承については海上交通によって能登にもたらされたといわれており、その起源を九州の馬渡島からの伝来とか曼荼羅の転訛などの説があるが定かではない。唄は産み字を非常に長く引き、殆ど合唱で唄うところにその特徴がある。昭和41年に「能登のまだら」として石川県指定無形民俗文化財に指定されおり、現在でも祝い事がある時に唄われている。

○七尾まだら

(唄いだし) チョイと出た出た出崎の浜から白帆が二三ばいチョイと出た出た

(本唄) めでためてたの若松様よ 枝も栄える葉も茂る

(脇唄) このま館は目出たい館 鶴は御門に巢をかける 新艘めでたや矢帆まであげて
 思うた港へそよそよと 安芸の宮島まわれば七里 島は七浦ななえびす 新艘つ
 くりて松前くだる 上る中荷は昆布にしん 花に浮かりよが月見をしよが 能登
 はお国の奥座敷 能登の岬の御所縁桜 枝は越後に葉は佐渡に 花は大坂の城で
 咲く 七尾湊は湯の町抱いて 沖に宝の船の群

(2) 文芸

天平20年(748)、越中国の国司として赴任してきた大伴家持は、当時越中国に含まれていた能登の各地を視察で訪れた。家持は香島津(七尾港付近)から船に乗り込み、熊来村(七尾市中島町)方面へ向かい、能登の島山から伐り出す船材や地域の産業、村々の風俗などを観察したのである。このとき家持が詠んだ歌の他に【能登国歌三首】として七尾港付近の様子が万葉集に残されている。

(3) 信仰

①印鑰神社(府中町)

七尾港の接する府中町に所在し、市杵島姫神を主祭神とする印鑰は国印と府庫の鍵を意味し、国政を掌る神社として祀られており、境内社に西宮神社、金比羅神社、細滝神社、境外社に愛宕神社がある。嘉永6年(1853)には七尾に出入りする物資の税金をかけた潤改役所が置かれ、七尾港の税関所的な役割をしており、神社には潤改役所のそろばんや浦高札などが保管されていた。また、明治期にかけての海上安全を祈願した祈禱札が多く残されている。

毎年5月に行われる青柏祭で「でか山」を曳きだす神社の一社であり、能登の夏祭りの口火を切る7月1日の御涼祭(互市祭)では多くの氏子らの奉灯が境内で乱舞する。

文政12年(1829)の銘のある神社前に高く建てられた石燈籠は、七尾港の灯台の役目を果たしていたと云われている。

②金刀比羅神社（三島町）

七尾港の西側に所在し、伝承では江戸時代の寛政年間に富岡町和倉屋佶兵衛が讃岐の金刀比羅を勧請して祀ったといわれている。和倉屋は藩政期に加徳丸の船頭をしており、大坂へ上る途中の瀬戸内海で大船の舵を拾い奉行へ届けたが、落し主が不明のまま舵を引取り、その舵を売却した代金で金刀比羅を勧請したという。社殿は山岳信仰で知られる石動山（国史跡：中能登町）の堂舎を買い求めたものである。



【金比羅神社奉納船絵馬 吉本善京筆】

拝殿には慶応3年（1867）銘の吉本善京筆の船絵馬と明治15年（1882）銘の船絵馬が掛けられている。また、本殿の両脇には大型の天狗面二面が奉納されており、天狗が神様の道先案内をすることから転じて船の水先案内をする神様として祀られたとされている。

（4）食べ物

①七尾酒

安永6年（1777）に記された「能登目具利」には「此所口（七尾）ハ能登一国の国府にて諸商売の間屋有て繁栄の地也」とあり、また「（前略）此所口名物多し、名酒数多有、中にも羽衣酒とて若松屋何某の方に有、其外豆飴等魚鳥の類の便りよく自由自在の国府なり」と記されている。七尾の酒は古くから越中・越後・佐渡・松前をはじめ敦賀や長州などへも売り捌かれるほどに盛んな産物であった。文化元年（1804）にこの羽衣酒が藩主の御膳酒として選ばれている。

②海鼠



【金ん子の天日干し風景】
（平成20年3月15日）

海鼠は古くから能登の名産品として知られており、平城宮跡から出土した木簡や延喜式にも能登国調として上納されていた。中世には能登畠山氏から将軍家へも贈られている。近世になると海鼠を茹でて乾燥させた煎海鼠（いりこ：地元では「きんこ」と呼ぶ）を「俵物」として扱い、長崎貿易の主要な輸出品となった。俵物は煎海鼠のほかに干鮑と鱧鱈を総称したもので、中国の高級食材として珍重されたのである。「長崎俵物御用」として専売制も敷かれ、七尾湾内の限られた村でしか漁

が認められなかった。その取扱いを七尾町人塩屋清五郎が一手に担い、莫大な利益を得ていた。

③四十物

四十物は魚を塩付けした保存食として知られる。近世七尾港の出入口となっていた府中町の浜では、加賀藩からの御印（通称四十物御印）を理由に七尾港附近での諸魚を扱う独

占権を主張している。府中浜では多くの商い船が出入し、七尾湾内はもとより他国までも四十物を運ぶ船で賑わっていた。

（5）生活用具

①七尾^{むしろ}筵

七尾町の南側に隣接する村々では古くから機織が盛んで、生活必需品である筵生産が行われていた。加賀藩は天保9年(1838)に天保の飢饉で苦しんでいる農民救済策として筵の生産を奨励したのである。これは当時の海運業繁栄の一端を担っていた海産物の運搬が深く関わっている。北の交易先である松前や江差では当時昆布や鰯が豊漁でそれを包む筵が不足していたことから、この奨励が始まったとされている。村々で織られた筵は七尾筵として所口(七尾)商人が松前などで売り出して、多くの利益を得ていたといわれる。特に、筵を織る村の中でも八幡村の筵生産が盛んになり、八幡筵として販売されていた。近代以降でも鰯を肥料として七尾へ運び入れるための袋としても筵が使用された。



【「七尾筵」積込の様子 昭和初期】
 (「七尾港」、昭和12年版、七尾町役場発行)

（6）対岸交流

七尾港の対岸に浮かぶ能登島は七尾湾内の中央部に位置することから、内湾(内浦)の沿岸部に位置する村々との交流が盛んであった。また、近世初期には七尾湾入口にある鰻目村の太間家が「かき取役」と称する役銀を沖合通船から取立てており、海の関所的な役割を果たしていた。寛永13年(1636)以降は加賀藩の流刑地とされ、流刑罪の廃止となる明治期までの約230年間続いた。その中には、加賀藩重臣寺島蔵人もいた。

明治18年(1885)以降になると、七尾北湾に面した穴水町曾良と能登島を經由して七尾を結ぶ郵便船を毎日2回就航させた。その後不定期な汽船や漁船での交通となって、定期船も設置されたが、昭和41年からは能登島商船株式会社が111トンのフェリーボートはまなす丸を1日5往復就航させた。しかし、能登島への船便での海上交通も昭和57年(1982)に完成した能登島大橋の開通によってその歴史に幕が下ろされたのである。

（7）人物

①浦役人

七尾港に接する府中浜は近世七尾町の海の玄関口となっており、府中町に残される元和6年(1620)の四十物船役御印によって府中町がその独占権を持っていた。そのため各地から集ってくる諸魚の売買や物資への課税を管理する浜でもあった。特に澗改役となった者は、「阿弥陀起請文」の誓詞を役所へ提出してその精勤を誓った。

②豪商

七尾を代表する豪商には越中屋や津向屋^{つむぎや}があげられる。これらは日本海側から下関を廻って瀬戸内海を通り大坂までの各湊で商売を行っており、その湊ごとに立寄った軌跡を廻船宿の「客船帳」と呼ばれる宿帳から探し出すことができる。

文化元年（1804）の島根県浜田市喜多屋「諸国御客帳」には、七尾船が73隻確認され、そのうちの越中屋船が13隻、津向屋船が9隻記載されている。越中屋の船は帆柱に「山吉」、津向屋は「山加」の帆印を入れていた。

廻船問屋の倉庫は市街地中心部を南北に流れる御祓川の西岸に建てられた。七尾港へは大船を沖に浮かべて小船で品物を運ぶ形態がとられ、川べりに接岸して積荷を上げ下ろししていた。御祓川に架かる橋の一つを「えっちゃん橋（越中屋橋）」と呼んでいたと伝えられる。

豪商たちの栄華の産物は、各自の菩提寺に見ることができる。越中屋喜兵衛は真宗大谷派の口郡触頭を勤める長福寺で、山門脇に置かれる天保3年（1832）の大型手水鉢や古代に渤海との交流地でもあった志賀町福浦（旧富来町）港の弘化4年（1847）銘方角石などを寄進している。また、境内墓地には他を圧倒する大きな墓所が存在する。一方、津向屋嘉兵衛は真宗大谷派の改観寺で、安政4年（1857）銘の大型石灯籠がある。

2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

（1）物資の流通を担う産業

①廻船交易

七尾港を拠点とする船主等の交易活動は各湊にあった廻船宿の「客船帳」から見る事ができる。特に近世の日本海交易ではいわゆる「北前船」が主となっていた。北海道江差の関川家に多くの史料が残されており、七尾商人との取引記録も多くあった。七尾からは鹿波屋・津向屋・越中屋・小島屋・吉田屋・須曾屋・下村屋・太田屋などの船が出入していた。[各湊の客船帳に見られる七尾船は「新修七尾市史 海運編」（平成11年刊行）にまとめられている。]

②地回り交易

地回り交易は七尾港から近場の湊を廻って商いを行う小型の商船である。七尾湾沿岸部の村々からの物資を七尾港に集め、その物資を他国（越中や越後）などへ運んだ。また、唐竹などは七尾湾沿岸の村から集められて、越中の東岩瀬や放生津などへ移出され、大河川の護岸資材として使用された。

③商館（商社・銀行）

○商社

明治期になり七尾の松井善四郎が1隻の汽船を運航させて七尾—飯田（珠洲市）間の航路を開設した。その後、七尾湾沿岸部北側にある穴水町や飯田町などから汽船による沿岸航路の開拓者が出て、七尾港を拠点として会社が設立され、後に合併して能越汽船になった。しかし、この会社も大正6年（1917）には北洋商船株式会社に吸収されてしまった。

また、地元七尾で大正7年に設立された丸中汽船株式会社は、海運では七尾湾内航路をほぼ独占的し、その港からの陸路線にはバスを走らせるといった総合交通会社であった。

○銀行

大正 13 年（1924）「七尾商工要覧」によれば、七尾町の銀行は本店が 6 店、支店 4 店、出張所 2 店であった。

3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

(1) 港湾関連産業

①造船業

七尾における造船は、奈良時代に大伴家持が能登の島山を巡行した時までさかのぼり、万葉集に詠まれた「舟木伐る」や「新羅斧」から造船に携わる舟木部の存在を知ることができる。また、幕末に加賀藩の軍艦所が置かれ、旗印の剣梅鉢紋から通称「梅鉢海軍」と呼ばれた軍艦の根拠地でもあり、また造船所や製鉄所等の施設もあった。

七尾港には現在 5 社の造船会社があり、小規模ながら大型船舶の修理や漁船の製造などを行っている。その中でも最も古いのは近藤造船所（明治元年設立）、次いで川崎造船所（昭和 3 年設立）、鳥毛造船所（昭和 7 年設立）である。毎年正月 2 日には、船大工やそれに携わる職人のお講として「太子講」が市内中心部にある願正寺で行われている。

また、七尾湾内には瀬嵐のマルキブネや三室船など木造小型船の造船技術が現在も残る。

②近代工業

近くに産する資源や港湾都市七尾を立地条件として操業し、港を利してともに発展した近代工業に人造肥料・セメント・イソライトがある。

明治の終わりに付近で燐鉱が採掘され、それが発端となり、大日本人造肥料七尾工場が建設され、硫酸肥料が生産された。昭和 4 年に操業開始した七尾セメント工場が立地したのは、近くにある石灰岩を原料とし、石炭は北海道や九州から海上輸送する便があるためとされる。

原料である石灰岩は南にある石動山系で採掘してケーブルで運んでいた。これに伴う製造や原料炭の移出入で七尾の港湾経済を向上させた。

和倉付近に産出する珪藻土を原料として断熱耐火煉瓦およびコンロを製造するイソライト工業は昭和 2 年に創業され、現在も主要産業として発展している。



【大日本人造肥料七尾工場 戦前】



【コンロ乾燥風景】
（「市勢要覧七尾」、S32 発行より）

③食品加工業

府中浜では藩政期から四十物を多く扱っていたが、次第に港付近には塩漬け以外の魚の加工場が立ち並び、魚を加工した練り物も多く生産されるようになった。藩政期から魚問屋をし、明治になり練り物の製造・販売をしている「スギヨ」はビタミンちくわやロイヤルカリブなど今まで多くのヒット商品を開発し、海の味を世界にも発信している。

4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

(1) 料亭・廓

七尾港の西岸に位置する常磐町が遊郭街であった。久田屋と呼ばれる一番大きな廓は、芸妓達の唄や舞が上手で器量もよかったといわれ、他の廓とは格が違っていたといわれる。その久田屋の菩提寺日蓮宗長興寺が小島町に所在し、大型の墓碑を並べた墓所はその隆盛を感じさせる。現在は3階建てであった廓もなくなり、近年までは数軒の料亭が立ち並ぶ繁華街であった。

(2) 歌舞伎

七尾の歌舞伎は古くから行われており、享保2年(1717)に加賀藩出船御用で能登を訪れた森田盛昌が記した「能州紀行」には、通称ちよんこ山と呼ばれる四月の山車祭りの記述で「(前略) 御宮の前に仮舞台を構へ歌舞伎有、(中略) 御神前相済、丹羽権平殿前にて是も仮ぶたいをかまへ、右の歌舞伎・狂言を相勤也(後略)」とある。また、神社の普請などでの資金集めのため、神社前に仮舞台を組んで数日間の歌舞伎興行も行われている。

七尾港の府中浜にある印鑰神社には、明治5年(1872)と明治24年(1891)に行われた大型の芝居興行記念額が奉納されている。また、山の寺寺院群に所在する本延寺にも、明治16年(1883)に行われた狂言の芝居番付額が掛けられている。

近代以降には常設の芝居小屋が建てられ、印鑰神社横の料理屋番伊にはかつて青海座と呼ばれた舞台小屋があったといわれている。これ以降、七尾町内には中島座や七尾歌舞伎座、大正座などが建てられた。現在、その名残ではないかという「でか小屋」と称される芝居小屋の保存を町おこしに連動させた市民活動が行われている。

(3) 祭り

①青柏祭の曳山行事(国指定重要無形民俗文化財)

大地主神社は通称山王さんと呼ばれ、七尾町に隣接する府中村の村社である。青柏祭は古くから四月の申の日行われており(現在は5月3・4・5日)、神饌を青柏の葉に盛って供える神事であることからその名が付いたとされている。祭りには七尾町内の鍛冶町・府中町・魚町の山町と呼ばれる三町からそれぞれ一台の山車が奉納される。山車は上に広がる形をし、七尾町を象徴する北前船を模したものとも伝えられている。山車の高さは約12m、上部の開きは約13m、車輪の直径は約2mと巨大なものである。山車は「でか山」と呼ばれ、上段の前面には歌舞伎の場面が飾られる。毎年行われる巨大山車の曳山行事はその製作や祭りの運営に巨額の費用がかかり、古くから七尾港の繁栄がなくては成り立たない神事である。なお、でか山の車輪の製作・修繕は市内の造船業者が請け負い、優れた

船大工の技能が生かされている。



【三台の「でかさ」が並ぶ 大地主神社境内】
(平成 18 年 5 月 4 日)

(4) 来遊文人

奈良時代の大伴家持の能登巡行以後、中世の能登畠山氏の治世には多くの文人墨客が訪れており、その中には当代随一の歌人と謳われた冷泉為広・為和親子が下向し、七尾湾に舟を浮かべてその情景を詠んでいる。また、近代では、佐佐木信綱や高浜虚子などが七尾を訪れ古代の歌人大伴家持を偲んで歌を詠んでいる。ほかに与謝野晶子が七尾と和倉温泉を訪れ 18 首の歌を詠んでいるが、その中に七尾港の賑わいを詠んだ以下の歌がある。

海たかく黒き油筒を着る如き大船も寄る七尾のみなと
家家に珊瑚の色の格子立つ能登の七尾のみそぎ川かな

5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

(1) 港発祥の地

半島を南北に縦断する邑知地溝帯の北端にある七尾港付近には 6 世紀初頭の盟主墳である矢田高木森古墳(全長 59m の前方後円墳)が存在する。その被葬者は日本海に通ずる海上交通の拠点といえる「鹿嶋津」を意識し七尾湾を臨む丘陵先端部に占地している。また、古墳時代初頭の日本最大級の倉庫群が発見された万行遺跡は七尾港の東に所在し、付近には倉庫に付随する船着き場等の港湾施設の存在が推定されており、現代まで続く七尾港の原型をみることができる。

(2) 港町の町並み

現在の七尾の町並みは、天正九年(1581)に前田利家が能登に入国し、山上の七尾城から港近くの小丸山城に移って、本格的に城下を整備したことに始まるが、能登畠山時代の 16 世紀前半から中頃の遺構が最近の発掘調査(2008 小島西遺跡)で確認されている。

近世七尾の町並みは街の中央を流れる御祓川を境に、東西を職人街と商人街とに分けられ、防衛上の対策として街を囲むように寺院が配置されている。七尾では明治 28 年、明

治 38 年の二度の大火に見舞われたが、大火を免れた七尾町家やと近代洋風建築が混在した歴史的な町並みも残る。時代を通して城下町や宿場町として機能し、個性的で重層的な都市空間構造を備えた七尾の町は日本海交易を担う商業都市として繁栄してきた。

（3）七尾港の眺望

小丸山公園から眼下に七尾港と黒瓦の屋根が続く七尾の町並みを一望することができる。他に港と町並みを一望できる視点場としては、七尾城本丸からの眺望が挙げられる。天正 5 年（1577）に七尾城を陥落させた上杉謙信は七尾城に登城した際に「聞きしに及び候より名地、賀・越・能の金目の地形と云い、要害山海相応し、海類嶋々の躰までも、絵像に写し難き景勝までに候」と、七尾城から眺めるその絶景に感嘆している。



【小丸山公園より望む七尾港 昭和初期】



【七尾城から望む七尾港 平成 15 年】

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

1. 港町の復活 ～ 一本杉通り ～

一本杉通りは、七尾の東西を貫く街道で多くの古い商家が残る。現在、通りには高澤ろうそく店・鳥居醤油店・旧上野啓文堂・勝本邸・北島屋茶店・赤倉邸の計6軒の登録有形文化財が建ち並ぶ。近年、青柏祭（でか山）に合わせて約400mの通りに50枚を超える鮮やかな花嫁のれんが店内に飾られ、その通りを新郎新婦が練り歩く「花嫁道中」を催すなど様々なイベントで市街地の活性化を図っている。



【花嫁道中】
(平成20年5月)

※花嫁のれん…花嫁が嫁入りの時に「のれん」を持参し、嫁ぎ先の家の仏間の入口に掛けられ、玄関で「合わせ水」の儀式を終えた後、「のれん」をくぐって、仏前にお参りして結婚式を行う。この時に使用されるのれんを「花嫁のれん」という。幕末から明治時代の頃より、加賀藩の能登・加賀・越中にみられる。



【花嫁のれん 鳥居醤油店にて】

2. みなとの賑わいの創出

年間80万人以上集客している、みなとオアシス七尾「能登食祭市場」を拠点として、七尾駅と御祓川沿いに南北に走る川渕通り（シンボルロード）を都市軸とし、東西の街道を歴史軸として、街中には他に神野邸・春成酒造店（登録有形文化財）など多くの伝統町家や近代建築等が存在する。これら地域の歴史遺産の保存活用による「歴史を生かしたまちづくり」の実践と「みなと」を核とした賑わいの創出が急務の課題である。



【食祭市場前から仙対橋に向かう「でか山」】
(平成 19 年 5 月 5 日)



【七尾市街地空撮写真】
(平成 12 年)